

選手 「選手の地位および移籍に関するFIFA規則」セミナーを開催

スペインサッカー協会、日本サッカー協会、そしてJリーグの主催による「選手の地位および移籍に関するFIFA規則」セミナーが、6月4、5日の2日間にわたり、JFAハウスで開催された。選手の地位および移籍に関するFIFA規則への理解を深め、今年に予定されてい

る日本の国内規程の改訂に伴い、今後起こりうる状況や、各クラブが取るべき戦略などへの考察を目的とし、Jリーグ、JFL(日本フットボールリーグ)各クラブの選手契約担当者など約100名が参加した。

講師を務めたのはスペインから招いたエミリオ

ガルシア シルベロ、ミゲル カルデナル カロ、ゴルカ ビリャル ポリャインの3氏。いずれもスペインサッカー協会などで法務を担当するスペシャリストで、FIFA諸規則の概念や具体事例の紹介、選手契約の仕組みなど、密度の濃い講義を行った。

契約期間満了の選手に対する移籍金の撤廃など、国内の移籍に関する規程が2009年よりFIFA規則に沿ったものへ移行するのに伴い、現在、ワーキンググループによる作業が続けられている。Jリーグの中野幸夫専務理事は「ルール改訂に向けて、われわれが今後、直面する課題、詰めなければいけない内容について、先進国のスペインの事例を聴くことのできたセミナーは、非常に貴重なものだった」と感想を述べた。



スペインから講師を招いてのセミナー。来るべき変化に備える参加者たちは、真剣に講義へ耳を傾けた

スポーツ振興 さいたまスポーツクラブのクラブハウス「SSCあすも」がオープン



総合型スポーツクラブを目指してオープン

特定非営利活動(NPO)法人さいたまスポーツクラブの活動拠点として誕生したクラブハウス「SSCあすも」(さいたま市見沼区堀崎町)のオープニングセレモニーが、6月1日に行われた。セレモニーには、地域を代表して清水勇人さいたま市長、Jリーグから鬼武健二チェアマン

ン、大宮アルディージャの渡邊誠吾代表取締役社長などが出席。さいたまスポーツクラブの会長を務める元サッカー日本代表の清雲栄純氏は「Jリーグに百年構想があるように、このクラブも50年構想を掲げ、総合型スポーツクラブのモデルになりたい」と抱負を語り、鬼武チェアマンも「これから増えていくであろう全国の(こうした)施設のお手本に」と今後への期待を述べた。

SSCあすもは、さいたま市より土地を借用し、建設には独立行政法人日本スポーツ振興センター「平成21年度スポーツ振興くじ助成金」を活用。687㎡の平屋建てで、アリーナ、スタジオ、トレーニング室などの施設を備え

る。これらの施設を利用し、ジュニアやレディースのフットサル、卓球やヨガ、スポーツ吹き矢、介護予防体操など、子供から高齢者が楽しめるプログラムが行われている。



アリーナを視察する鬼武チェアマン



トレーニング機器も充実

2009年度 スポーツ振興活動 第2期申請分の支援を決定

Jリーグは、Jリーグ各クラブが実施するサッカー以外の地域スポーツ振興活動への支援に関し、2009年度第2期申請分(2009年5月15日締め切り)につき、6クラブ10件の活動支援を決定した。これにより2009年度のスポーツ振興活動支援は第1期申請分(2009年3月17日締め切り)の62件を加え、全72件となった。

2009年度 地域スポーツ振興活動支援 第2期承認一覧(2009年6月16日現在)

No.	クラブ名	行事名	対象種目	形式	参加対象者	開催期間	場所
1	東京V	東京ヴェルディトラック&フィールド教室	ウォーキング・ランニングなど	教室	一般(主にシニア世代)	7~12月(毎月2回)	ヴェルディ人工芝グラウンド、味の素スタジアム、国立競技場
2		ヴェルディ・ベレーザレディースフットサル教室	フットサル	教室	成人女性	7~12月(毎月2回)	ヴェルディ人工芝グラウンド
3		東京ヴェルディラグビー教室	ラグビー	教室	小学生	10月1日	ヴェルディ人工芝グラウンド
4	新潟	アルビレックス新潟ビーチカーニバルin瀬波温泉ビーチ	ビーチサッカー	大会・教室	一般	8月30日	村上市瀬波温泉海岸
5	岐阜	FC岐阜 ドッチビー スポーツ大会(仮称)	ドッチビー	大会	一般	11月(予定)	岐阜メモリアルセンター芝生広場または北西部グラウンド
6		FC岐阜 いびがわウォーキング	ウォーキング	教室	一般	8~9月	揖斐川町(夜叉ヶ池を中心としたウォーキングコース)
7	G大阪	精神障がい者スポーツアカデミー バレーボール教室	障がい者バレーボール	教室	大阪府下の精神障がい者バレーボールチームに所属する方	6月27日(予定)	パナソニック アリーナ
8	神戸	ヴィッセルカップバドミントンチャレンジ2009	バドミントン	大会	兵庫県下の体育連盟に加盟する学校に在籍する生徒で、学校長が健康状態に異常がなく、競技に参加しても差し支えないと認めた生徒であること	8月23日	神戸親和女子大学体育館
9		HYOGOノーマライゼーション陸上スポーツ大会 in KOBE	障がい者スポーツ	大会	日ごろ運動習慣のある健康な方	11月15日	神戸総合運動公園ユニバー記念競技場
10	鳥栖	第6回佐賀ビーチサッカーフェスティバル	ビーチサッカー	大会	18歳以上の心身ともに健康な男女(18歳以下でも保護者の同意書があれば参加可)	7月11・12日	佐賀県唐津市の浜海水浴場

理事選任について

Jリーグは、6月16日に開催した理事会、総会において、川崎フロンターレの武田信平代表取締役社長をJリーグ理事に選任した。

Jリーグ理事

	氏名	年齢	所属
チェアマン	鬼武 健二 (おにたけ けんじ)	69	(社)日本プロサッカーリーグ
専務理事	中野 幸夫 (なかの ゆきお)	53	(社)日本プロサッカーリーグ
常務理事	佐々木 一樹 (ささき かずき)	57	(社)日本プロサッカーリーグ
理事	海野 一幸 (うみの かずゆき)	63	(株)ヴァンフォーレ山梨スポーツクラブ 代表取締役社長
理事	梅本 徹 (うめもと とおる)	60	(株)京都パープルサンガ 代表取締役社長
理事	大東 和美 (おおひがし かすみ)	60	(株)鹿島アントラーズエフシー 代表取締役社長
理事	久保 允誉 (くぼ まさたか)	59	(株)サンフレッチェ広島 取締役会長
理事	齋藤 正治 (さいとう まさはる)	59	横浜マリノス(株) 代表取締役
※理事	武田 信平 (たけだしんぺい)	59	(株)川崎フロンターレ 代表取締役社長
理事	風間 八宏 (かざま やひろ)	47	(有)アハト風間
理事	傍士 鉄太 (ほうじ せんた)	53	(財)日本経済研究所 専務理事
理事	三屋 裕子 (みつや ゆうこ)	50	(株)サイファ
理事	村井 満 (むらい みつる)	49	(株)リクルートエージェント 代表取締役社長
理事	武藤 泰明 (むとう やすあき)	53	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
理事	田嶋 幸三 (たしま こうぞう)	51	(財)日本サッカー協会 専務理事
理事	田中 道博 (たなか みちひろ)	51	(財)日本サッカー協会 事務局長
理事	松崎 康弘 (まつざき やすひろ)	55	(財)日本サッカー協会 審判委員長
監事	眞壁 潔 (まかべ きよし)	47	(株)湘南ベルマーレ 代表取締役
監事	宮 裕 (みや ゆたか)	54	あずさ監査法人 代表社員公認会計士

※=新任

2008年度収支決算について

Jリーグは、6月16日に開催した理事会、総会において、2008年度のJリーグ収支決算を承認した。なお決算額は、一般会計と特別会計を合算した総括表で表示している。

2008年度(平成20年度)収支決算(総括表)

単位:百万円

科目	08年度実績(A)	08年度予算(B)	差額(A-B)
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
①基本財産運用収入	0	0	0
②入会金収入	120	0	120
③会費収入	1,026	1,027	▲1
④事業収入	11,699	11,564	135
協賛金収入	4,624	4,623	1
Jリーグ主管試合入場料収入	223	286	▲63
放送権料収入	5,323	5,262	61
商品化権料収入	613	578	35
その他	916	(*) 814	102
事業活動収入計	12,845	12,591	254
2. 事業活動支出			
①事業費支出	10,522	10,242	280
リーグ運営経費	2,966	2,914	(*) 53
クラブへの配分金	7,027	6,825	202
その他	529	503	26
②管理費支出	2,073	2,222	▲149
事業活動支出計	12,595	12,464	131
事業活動収支差額	250	127	123
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入	119	0	119
2. 投資活動支出	202	21	181
投資活動収支差額	(*) ▲84	▲21	(*) ▲62
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入計	0	0	0
2. 財務活動支出計	1	0	1
財務活動収支差額	▲1	0	▲1
IV 予備費支出	0	100	▲100
当期収支差額	166	6	160
前期繰越収支差額	1,237	1,018	219
次期繰越収支差額	1,403	1,024	379

*四捨五入により、一部に合計の合わないところがあります

Jリーグマッチコミッショナー 追加選任について

Jリーグは、6月16日に開催した理事会において、下記マッチコミッショナーを2009年度のJリーグマッチコミッショナーとして追加選任することを承認した。

Jリーグマッチコミッショナー

高田 豊治 (たかた とよはる)
1999~2003年: Jリーグマッチコミッショナー
2002~03年: Jリーグマッチコミッショナー委員会 委員長

第6回中日本インターシティカップ(U-15)、第5回JCYインターシティカップサッカー(U-15)西日本大会、第2回JCYインターシティカップU-15サッカー北日本大会を後援

Jリーグは、昨年に引き続き日本クラブユースサッカー連盟が主催する第6回中日本インターシティカップ(U-15)、第5回JCYインターシティカップサッカー(U-15)西日本大会、および第2回JCYインターシティカップU-15サッカー北日本大会を後援する。これらの大会は、日本クラブユースサッカー選手権大会に出場できなかったチームがモチベーション高く参加できる競技会として位置づけ、日本の将来を担うユース年代の少年たちのサッカー技術の向上と健全な心身の育成を図るとともに、クラブチームの普及と発展を目的として開催する。

2009カルビーサンフレッチェカップを後援

Jリーグは、昨年に引き続き7月に広島で開催される「2009カルビーサンフレッチェカップ」(U-15およびU-12)を後援する。同大会は、U-15およびU-12年代の理想的な試合形式を用いたゲーム環境を整え、個を伸ばしていくこと、および指導者の交流、情報共有を図り、豊かな人間性の育成を目的とする。

メニコンカップ2009日本クラブユースサッカー東西対抗戦を後援

Jリーグは、昨年に引き続き日本クラブユースサッカー連盟などが主催する「メニコンカップ2009日本クラブユースサッカー東西対抗戦(U-15)」を後援する。今回15回目を迎える同大会は、日本の次世代サッカー界を担うユース年代の優秀選手を一堂に集め、サッカー技術の向上と健全な心身の育成を図るとともに、クラブチームの普及と発展を目的として開催される。

第10回豊田国際ユース(U-16)サッカー大会を後援

Jリーグは、昨年に引き続き「第10回豊田国際ユース(U-16)サッカー大会」を後援する。同大会は、次世代のサッカー界を担うU-16の選手のサッカーを通しての国際交流と選手育成を目的とする。

「かんきょうみらいカップ2009」事業を後援

Jリーグは、環境未来カップ実行委員会(札幌市、(財)北海道サッカー協会、北海道新聞社)が主催する「かんきょうみらいカップ2009」を後援する。同事業は、スポーツレクリエーションなどの活動を通じて子供たちに環境の大切さを知ってもらい、環境に関する行動喚起を醸成することを目的とする。

第15回日本電動車椅子サッカー選手権大会、第13回電動車椅子サッカー関東大会、第1回日本パワーチェアフットボール選抜大会を後援

Jリーグは、6月16日に開催した理事会において、第15回日本電動車椅子サッカー選手権大会、第13回電動車椅子サッカー関東大会、および第1回日本パワーチェアフットボール選抜大会を後援することを決定した。これらの大会は、日本において電動車椅子サッカーの普及振興、技術向上を図ることを目的とする。

27 ヴィッセル神戸



ホームタウンで多彩なアクション。 街とともに歩み、豊かな社会を



兵庫県立いなみ野特別支援学校で知的障がいを持つ少年たちにサッカー指導を行う北本選手 ©ヴィッセル神戸

障がい者と交流の輪

「みけんでボールをとらえると痛くない」。ヴィッセル神戸のDF北本久仁衛選手がヘディングのコツを教える相手は、知的障がいを持つサッカー少年たち。アドバイスに耳を傾ける表情はみな真剣だ。4月21日、兵庫県稲美町の県立いなみ野特別支援学校。チームメートのDF近藤岳登選手とともに同校サッカー部の練習に加わり、シュート練習やミニゲームなどで汗を流した。Jリーガーの手ほどきを受けた部員たちは大喜び。近藤選手は「ボールを追っていて、笑顔しか出てこなかった。どんな形であれ、サッカーはみんな楽しめるスポーツということ、僕たちのほうが教えられた」と声を弾ませた。



近藤選手

経緯は2009年3月14日の川崎フロンターレ戦にまでさかのぼる。ヴィッセル神戸は今年から北本選手と近藤選手の提案で、障がい者をホームゲームに招待する「情熱シート」を、ホームスタジアム神戸などに設置。本拠地開幕戦の川崎F戦に招かれた同校の生徒が両選手にお礼の手紙を送り、心温まる気遣いのお返しにサッカー教室が実現した。

2人が障がい者スポーツに強く関心を持つようになったのは、昨年11月に神戸市で開かれた「HYOGOノーマライゼーション陸上スポーツ大会」への参加がきっかけだった。ブライ



北本選手

ドサッカーなどを体験した北本選手は「全盲の少年が音の鳴るボールをすごくうまくけていた。サッカーが好きなのになかなか試合を見に来られない人たちに、ワンプレーに沸くスタジアムの雰囲気味わってもらえたら」。その一念で情熱シートの設置を呼びかけた。近藤選手も「夢や希望、パワーを持って帰ってほしい」と目を輝かせる。

「サッカー選手としてだけではなく人間として、幸せな気持ちの重なり合いを感じることができる」と北本選手が話せば、近藤選手も「こうした活動がチーム全体、Jリーグ全体に拡大する第一歩になればうれしい」と語り、交流の輪をさらに広げようと意欲的だ。

育成センターで職業体験

ヴィッセル神戸の三木谷浩史会長が建設費用を負担し、今春完成した育成センター「三木谷ハウス」(神戸市西区)。6月1日から5日まで、地元の神戸市立井吹台中学校サッカー部員6人を対象に職業体験が行われた。兵庫県教育委員会が「地域に学ぶ」ことを掲げ、県下の中学2年生を対象に毎年実施する「トライやる・ウィーク」の一環。生徒たちは三木谷ハウス内の掃除や食事作りなどにチャレンジし、裏方の苦勞に触れた。橋本大資君は「サッカー選手の生活に興味があったので参加したけど、足腰が疲れた。三木谷ハウスで働いている人たちは大変」と目を丸くした。最初は地道な作業にも戸惑いながら、ギョーザの具にトマトやナッツを混ぜるなどの工夫も。フードコーディネーターの村野明子さんは「めんどろなことも楽しめるようになってほしい。いい社会勉強になれば」と成長を期待した。

三木谷ハウスには、トップチームの若手選手やユースの遠距離通学者らが寄宿する。居住用の個室や談話室を備え、体づくりに配慮した栄養食を提供。練習拠点「いぶきの森球技場」にも近く、サッカーに専念できる環境が整う。それでも、目指すのは単なる育成施設ではなく、食育セミナーなど市民を巻き込んだ仕掛



三木谷ハウスで寮生が食べるギョーザを調理する。生徒たちは裏方の苦勞に触れた ©神戸新聞社

けも構想する。村野さんは「例えば、近所の奥さんたちと料理を作って選手と一緒に食べる、なんてこともおもしろいと思う。そうすることで、選手の人となりに触れ、栄養のあるレシピも覚えらる。もちろん生活リズムを崩さないことが前提だけど、多くの人が有意義な時間を過ごせるよう、いろいろなアイデアを出したい」と、「次の一手」を思案している。

成熟する地域貢献

「イベントにカズ(三浦知良選手=現横浜FC)を呼んでくれ」。以前はスター選手の人気を当て込み、クラブ側へのこうした依頼が少なかつたという。しかし今は、一過性のにぎやかしただけにとどまらず、ホームタウンを舞台に多彩なアクションを起こしている。ここで紹介した障がい者との交流や三木谷ハウスでの職業体験は、本当の意味で地域貢献が成熟してきた象徴的な取り組みといえる。このほかにも、小学校で児童らと将来の目標を語り合う「夢で逢えたら」は恒例行事として定着したほか、阪神・淡路大震災の経験を基に被災地支援の募金活動にも積極的だ。いずれも「街とともに歩み、豊かな社会をつくりたい」といういちずな思いが、選手やスタッフを突き動かす。クラブ創設から15年目。「ヴィッセルにかかわるすべての人を幸せに」。その理念はたくましく根を張りつつある。

(神戸新聞社 佐藤 健介)

スポーツを通じて豊かな社会の創造を目指す「Jリーグ百年構想」の実現に向けて、JリーグとJクラブはさまざまな施策を展開している。その活動の最前線ともいえるJクラブは、それぞれのホームタウンを中心に、地域の特色、実情などに応じて多彩なプログラムに取り組んでいる。地域に根差し、活力を与え、人々の交流と触れ合いを促進する、こうした活動を紹介するシリーズの14回目は、ヴィッセル神戸と横浜FCにスポットを当てた。



スポーツで、もっと、幸せな国へ。
J LEAGUE 百年構想

28 横浜FC



少しずつ輝きを増す地道な活動。 「小さな接点を大事に」

「夢で逢えたら」

午前中の練習はみっちり2時間。汗だくの練習着を脱ぎ捨て、急いでページュのスーツに着替えた。関東地方の梅雨入り後、初めて晴れ間ものぞいた6月11日。足早に向かったのは自宅ではなく、練習場から車で20分足らずにある池上(いけうえ)小学校(横浜市神奈川区、木内武敏校長、児童数418人)。ホームスタジアムのニッパツ三ツ沢球技場にほど近い、丘の上の小さな学校だ。

「僕がサッカー選手って、みんな知ってますか」一。6年1組の教室はどっと沸く。午後1時45分から始まった5時間目は、待ちに待った特別授業だ。児童31人を受け持つのは「カズ」先生こと横浜FCの三浦知良選手。前所属のヴィッセル神戸時代にスタートさせた小学校訪問企画「夢で逢えたら」はことし6年目を数える。いまや現役選手やOB選手らが先生役となり、全国各地の学校で訪問授業をするスタイルは珍しくないが、三浦知はその先駆的な存在だ。「以前のように『月イチ』ペースとはいかないけど、年に2、3回が目標。横浜FCの地元で、クラブの存在とかサッカーの価値を少しでも広められたらいいなと思っている。それに、子供から学ぶことも多いんだよ」と三浦知はその意義を口にする。

児童にはあらかじめ、自分の「夢」をテーマに400字詰め原稿用紙へ思いの丈をつづってもらう。三浦知が事前に目を通し、授業の参考に

するのだ。冒頭はカズ自身の体験談。この日の児童と同じ12歳のとき、中学には行かずにブラジル留学する方法はないかと真剣に考えて先生にたしなめられた、というエピソードを披露。実体験に基づいたトークは、サッカーに興味のない女兒の心まで引き付けたようだ。「普段の授業と違ってリラックスしていただろうし、僕の体験を聞いてギラギラした目をしていた。子供らしくて良かった」と三浦知もダイレクトな反応を喜ぶ。

「親の世代にとっては、『キング・カズさん』とも言うべき大きな存在。ただ、子供たちはまったく動じずに質問するんですよ」と、木内校長は児童の積極性に驚いた様子。お笑いタレントになりたいという男児2人が三浦知の前で即興コントを演じるなど、45分間の短い授業は大いに盛り上がり、締めはサイン会と記念撮影。「この子たちはきっと、家に帰って今日のことを親御さんに話すでしょうし、一生の忘れられない思い出になると思います」と木内校長が言えば、三浦知も「夢の大小は問題じゃない。夢に向かうことが大事。自分は今でも子供たちと同じように夢を持っているし、ずっとワールドカップ(出場)という夢を持ち続けたい」。はつらつとした子供たちの姿に、勇気づけられるという。

軸足は地元小学校に

三浦知は42歳の今季、J2リーグの得点、出場の最年長記録を次々と更新した不世出のスター。その影響力は計り知れないが、横浜FCには彼の加入以前から、ホームタウン活動の軸足を地元小学校に置いてきた自負もある。1999年発足の後発クラブ。同じ横浜には横浜F・マリノス(横浜FM)という名門があり、さらに神奈川県内には川崎フロンターレ、湘南ベルマーレと実力も歴史も十分なクラブがひしめく。1県1クラブのチームとは置かれた状況も全く違うから、ホームタウン活動にもひと工夫が必要だった。



授業終了後の記念撮影。不世出のスターと過ごした時間は、子供たちの一生の思い出となるだろう ©神奈川新聞社

「2001年に学校回りを始めたとき、最初は2校からスタートしたんです」と話すのは、横浜FCのホームタウン担当の金井智恵子SC事業チームマネージャー。横浜FMが訪問授業を得意とするならば、横浜FCは放課後の時間帯を狙った。共働き家庭の子供らを集める市の施策「はまっ子ふれあいスクール」とタイアップし、スタッフが夕暮れの学校を訪れる。持参したのは、市販の網にフラフープをくりつけた手製の「キックターゲット」。涙ぐましい派遣活動は次第に広がりを見せ、いまや年間100校へと増えた。スポンサーの協力の下、週末は保護者同伴、弁当持参の形を取り、子供の遊びと親の食育指導の両面をバックアップするなど、質量ともに一層の充実を図る。



金井 SC事業チームマネージャー

カズが講師を務めたのと同じ日、三浦淳宏、早川知伸、小野智吉の3選手も別の小学校へ。今季のJ2リーグ戦は年間459試合の長丁場。選手がホームタウン活動に協力できる時間は限られるが、「夢で逢えたら」授業に三浦知以外の選手がかかわったのはこの日が初めて。地道な活動は少しずつ、輝きを増している。金井さんは言う。「人(社員数)も、物も十分ではない。その分、小さな接点を大事にしていきたいんです。10年経っても、スタンスは同じ。これからも変わらないと思います」。

(神奈川新聞社 塩野 圭太)



神戸に所属していた時代から続く「夢で逢えたら」も6年目。三浦知はJリーガーやOBによる小学校訪問企画の先駆的な存在だ ©神奈川新聞社

© J.LEAGUE PHOTOS



2009年5月9日、J1リーグ戦第11節、大分トリニータ対横浜 F・マリノスの試合で史上初のJ1主審担当通算300試合を達成した岡田正義氏。30年以上にわたって審判活動続ける岡田氏へのインタビューを、今号と次号の2回に分けて掲載する。

【PROFILE】

岡田 正義(おかだ まさよし)
1958年5月24日生まれ。東京都出身。93年に国際主審となり、98年のFIFAワールドカップにおけるイングランド対チュニジアなど、数多くの国際試合を経験。Jリーグでは97年、2002年、07年に優秀主審賞を受賞。02年からは、日本サッカー協会のスペシャルレフェリー(現 プロフェッショナルレフェリー)として活躍。



© J.LEAGUE PHOTOS

Jリーグにおける審判活動も17シーズン目。J1第11節の大分対横浜FMでJ1主審担当300試合を達成

普段からの準備が重要

——初めてJリーグで主審を務めた試合のことを覚えていますか。

岡田 Jリーグが始まった年、1993年のサントリーシリーズ第2節、横浜マリノス(現 横浜F・マリノス)対ガンバ大阪の試合でした。たくさんのお客さん、チアホーンの音など、日本サッカーリーグの時代とは、まったく違った雰囲気でした。「成功しなければ、プロとして食べていけない」といった感じで、選手のひたむきさ、目の色が違いました。

——審判の立場から見て、Jリーグの誕生をどのように思いましたか。

岡田 高いレベルの試合のレフェリングができるということで、レベルアップのすごくいいチャンスと考えました。審判のレベルを上げる環境も整ってきました。選手も頑張っていますし、われわれ審判も普段からレベルアップを図らなければ、という思いを強くしました。

——300試合の中で、特に印象に残っている試合はありますか。

岡田 チャンピオンシップやJ1・J2入れ替え戦といったプレッシャーの大きい、重要な試合も記憶に残りますが、94年のサントリーシリーズでサンフレッチェ広島が優勝を決めた試合です。ジュビロ磐田スタジアム(現 ヤマハスタジアム(磐田))で、1-1で迎えたロスタイムに広島が1点を入れて優勝を決めました。リーグ戦

の中で優勝に絡む試合の主審を務めることができたのは、とてもラッキーだったし、感激しました。ガラスのチェアマン杯が割れてしまうというハプニングもあって、よく覚えている試合です。

——Jリーグにおける審判活動も17シーズン目になりますが、コンディションの維持にも配慮されてきたと思います。

岡田 試合はもちろん大事ですが、それに至る普段からの準備も非常に重要です。日常生活の中から、けがをしない、病気をしない、試合にベストの状態に臨めるようにしないと。そのあたりをきちんとコントロールしてきたつもりです。また、メンタル面でも負担がかかります。勝敗に直接、関係するような判定に、厳しい意見が寄せられることもあり、メンタル面のリカバリーも大切になります。

——どのようにリカバリーを行うのですか。

岡田 ベストを尽くしたわけだから、割り切れないですね。その経験を生かし、より良いジャッジができるように、強い気持ちで努力していくことです。

夢はウェンブリー

——審判として信条のようなものはありますか。

岡田 「これで十分」と思ったら、すでに後退が始まっている、ということです。レベルを維持するためには、常に一つ上を目指すことだと思って審判を続けてきました。そこだけは変わりません、今も上を目指していますから。

——上を目指すというと。

岡田 (イングランドの「聖地」といわれる)ウェンブリースタジアムのピッチ上で、笛を吹いてみたいんです。それがわたしの審判活動の原点ですから。大学生のころにテレビで見て感動し、FIFAワールドカップの審判を務めるという目標につながりました。当時は、20歳ぐらいで審判をやっている人も少なく、目標を周囲に話しても「岡田くん、何を言ってるの」という感じでした(笑)。でも、「ウェンブリーに立ちたい」というのは、本当の夢なんです。

——98年にフランスで開催されたFIFAワールドカップの主審に選ばれ、一つの目標を達成しました。

岡田 審判を始めたのが19歳。審判活動により良い環境を求めて、3回ほど転職もしました。その間、日本にプロリーグが生まれ、国際主審にもなってチャンスが広がり、21年かかってフランスに至りました。一つの達成感があったと同時に、新たなスタートです。世界的な注目度が高く、プレッシャーの大きい試合で主審を務めた経験と自信は、平常心を保つという意味でもJリーグで役に立ったと思います。また当時は、選手をけがから守るために後方からのタックルに対する判定を厳しくしようとした時期で、大会前の審判講習などで得た情報、知識を報告するという形で、日本に伝えることができました。(続く)



© J.LEAGUE PHOTOS

岡田氏が1997年から愛用する野田鶴声社製のホイッスル



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。